

# 水平社宣言（解説）

（西光万吉・起草）

1922年（大正11年）3月3日 全国水平社創立大会（京都岡崎公会堂）

全国に散在する吾が特殊部落民よ団結せよ。

被差別部落の人口は、わが国、全人口に対して少数であると同時に、ある地域内においてもやはり少数であった。まさに散在するのである。部落の民衆は、常に少数派であるがゆえに泣かされてきた。水平社の団結は、理論や知識でなく、差別の中で必死になって生きていく中からつかみ取った知恵である。

長い間虐められて来た兄弟よ、過去半世紀間に種々なる方法と、多くの人々によつてなされた吾等の為めの運動が、何等の有難い効果をもたらさなかつた事實は、夫等のすべてが吾々によつて、又他の人々によつて毎に人間を冒瀆されていた罰であつたのだ。

「兄弟よ」とは、苦しみを同じくするものへの熱烈な呼びかけである。

「過去半世紀間」とは、明治4年（1871）解放令から大正11年（1922）全国水平社創立大会（明治維新以来）の50数年間をさす。

「種々なる方法と、多くの人々によつてなされた吾等の為めの運動」、その「運動が何等の有難い効果をもたらさなかつた」と評価する。その原因は、「夫等のすべてが吾々によつて、又他の人々によつて毎に人間を冒瀆されていた」からであると述べている。

すなわち、水平社は、同情融和政策の否定する。

そもそも同情とか、憐憫とか、慈悲というものは、どこからでてくるのだろうか。それは人間の思い上がりに発するのではないだろうか。

「お前は貧乏だからつらからうね」と同情し、「お前は部落に生まれて運が悪かつたね」と憐憫をよせ、そして、「今は貧乏な部落の人間でも、世を呪わず、人を怨まず、自分に絶望せず、善行を積みば、来世は必ず幸せになれるんだよ」と慈悲をたれる人は少なからず気持ちがいいだろう。しかし、人の世にこれほど憎むべき、傲慢不遜の行為はない。

それは、自らの身分の尊さ、地位の高さ、財の豊かさを何の疑いもなく、至極当然のこととして肯定していることであり、それは同時に私たちの地位や身分の低さを肯定し定着させようとするものである。

大日本平等会創立大会での平等会をこき下ろした水平社の宣伝演説（西光万吉）

「今日まで随分多くの人たちが、部落の改善を唱え、融和を説き、そして憐憫や同情を寄せてこられました。けれども、もし、改善すべきものがあるとしたら、それは特殊部落ではなくて、私たち三百万の人間を特殊な存在と見なしている社会そのものではありませんまいか。私たちは、かつて我が身を特殊などと思ったことはありません。特殊な事実はどこにもないからであります。それを部落の生まれだと言って差別し、政治の上でも経済の上でも、更に教育や軍事の上でも圧迫を加えて貧困のどん底につき落とし、とうとう特殊にしてしまったのは、実に社会そのものではありませんか。このような道義のはずれた社会を、人間的正義の社会に改善、あるいは改造することなくして、なぜに私たち三百万人に人間としての心の幸福がおとずれましようか。」

同情融和論の批判と指摘を水平社は明確に行なった。（よき日の為に）

- ① 同情融和運動は、本質的な差別心にほおかむりして、絶対優位の立場から同情や憐憫を与えようとしている。
- ② 同情融和運動は、差別の責任を部落の民衆自身にあるとし、差別の解消は本来社会そのものの改善によつてなすべきであるのに、部落の改善によつてこれをなそうとしている。

「（これら）の運動が（われわれ部落の民衆にとって）何等の有難い効果をもたらさなかつた。」そして、

その「事實は、夫等のすべてが吾々によつて、又他の人々によつて毎に人間を冒瀆されていた罰であつたのだ。」

人間の冒瀆とは、本来平等であるものを下位において、絶対優位の立場から憐れみを注ごうとする態度、まさしくそれは部落の民衆の人間性に対する冒瀆なのである。

そして、そのことが、部落の民衆以外の他の人々によつてなされた場合には憤りがあるばかりであるが、部落の民衆自身によつても「部落の民衆の人間性を冒瀆する運動、同情融和運動は行われていた。「全国細民部落改善協議会」には、大臣、華族等と共に、部落の融和運動家数十名が参加していた。

「罰」とは、他人の過ちが己に禍いすれば憤りがあるだろう。しかし、自己の側の過ちが自己の「人間性の冒瀆」となつて返つてきたことに対しては、苦渋に満ちた反省があるばかりである。宣言文はこのことを「罰」という言葉で表現している。

そしてこれ等の人間を勦るかの如き運動は、かえつて多くの兄弟を墮落させた事を想へば、

「人間を勦るかの如き」とは、本当に人間を勦る運動ではない。差別の根本には何ら変更を加えることなく、表面だけで差別の解消を口にし、上からの同情を振りまこうという運動のことである。

この運動は、かえつて多くの兄弟（部落の民衆）を墮落させたと宣言文は訴えている。

「墮落」とは何か。同情融和・部落改善のやり方は、例えて言えば、理由もなく相手を殴りつけて瀕死の重傷を負わせておきながら、お前は惨めだ、憐れだ、気の毒だと言っているのとそっくり同じではないかと思う。それが果して同情だろうか。そのような暴漢に、どうぞ仲よくお付き合い願いますと、頭を下げて頼みにいくのが果して融和であろうか。

このような見方からすれば、同情融和運動に加わつて、「どうぞ仲よくお付き合い願います」と頭を下げて頼みに行くのは、そのこと自体許されない「墮落」である。

此際吾等の中より人間を尊敬する事によつて自ら解放せんとする者の集団運動を起せるは、寧ろ必然である。

「想へば」（反省すれば）、「自ら解放せんとする者の運動」、すなわち水平社の運動は以上の反省から必然的に生まれた。

「夫等のすべてが」「人間を冒瀆」する運動とは、同情融和運動のすべてを指す。

「人間を尊敬することによつて」とはどういうことなのか。

女性や、労働者や、貧しい者や、部落の民衆を賤しいとして差別をするのは、社会の秩序が貴賤の別によつて維持されるという封建思想にわざわざいさされて、人間は生まれながらにして平等であり、自分が尊ければ他の人も尊いという真理に気づかないからである。人間に上下、貴賤ありと思つている人たちは、鬼に魂を傷つけられ人間性を喪失してしまつた存在である。

「人間を尊敬する」とは、「人間は生まれながらにして平等であり、自分が尊ければ他の人も尊いという真理に立つことであり、この場合、特に部落の民衆自身が人間的尊厳を自覚し、まちがつても自らが自らの「人間性を冒瀆」することがあってはならないと説いている。

- ① 同情的差別を排することによつて部落を解放せんとす。
- ② 部落民衆の自発的運動によつて部落を解放せんとす。
- ③ 部落民衆に人間的尊厳の覚醒をうながすことによつて部落を解放せんとす。

兄弟よ、

苦しみを同じくするすべての部落民衆に対して、いたわりと、親愛と、団結の気持ちをこめて。

吾々の祖先は自由、平等の渴仰者であり、実行者であつた。

自由・平等の実行者とは、時の支配権力に対する反抗者。支配者側からみれば、反逆という一番の重罪であり、反抗する側から言えば、「自由、平等の実行者」なのである。

ろう劣なる階級政策の犠牲者であり男らしき産業的殉教者であつたのだ。

「殉教者」、水平社の指導者のみならず多くの部落民衆によって、キリスト教の思想は親しみを持って迎えられていた。それは、人間平等の理念と虐げられた者への救いの教えであつた。

「階級政策の犠牲者・産業的殉教者」、水平社綱領には、われわれ部落民衆は絶対に経済の自由と職業の自由を社会に要求し以て獲得を期すとある。

ケモノの皮剥ぐ報酬として、生々しき人間の皮を剥ぎ取られ、ケモノの心臓を裂く代価として、暖かい人間の心臓を引裂かれ、そこへ下らない嘲笑の唾まで吐きかけられた呪はれの夜の悪夢のうちにも、

「呪われの夜」、江戸時代から筆舌に尽くし難い差別に苦しんできた今まで暮らしては、まさに呪われの夜であり、暗黒の時代であつた。

「ケモノの心臓を裂く代価として、暖かい人間の心臓を引裂かれ」とは、男らしき産業的殉教者の具体的説明である。部落の民衆が、その仕事として昔からさせられてきた屠殺・皮革の仕事。その仕事にたずさわるが故に受けてきた筆舌に尽くし難い蔑視。その心の傷は、心臓を引裂かれるほどと表現しても決してオーバーではない。

「そこへ下らない嘲笑の唾まで吐きかけられた呪はれの夜の悪夢」

「和七少年の死」(物語 部落解放史) 北谷 正

何人もの和七が、江戸時代から今の今にいたるまでこのような惨い死を遂げてきた。生まれては死んでいった何千何万という部落の民衆が受けたこのようなつらいひどい差別の量を宣言文は一語「呪われの夜」と固めた。

なお誇り得る人間の血は、涸れずにあつた。

人間としての尊厳を有している。

他人に部落民と嘲られると、つい自分の指先をおすと針で突き刺してみないではおれない。にじみ出る血の赤さで、自分はまちがいに温かい血の通っている人間だということをおかめずにはいられない。

そうだ、そして吾々は、この血を享けて人間が神にかわらうとする時代にあつたのだ。犠牲者がその烙印を投げ返す時が来たのだ。殉教者が、その荊冠を祝福される時が来たのだ。

悪夢のような差別の過去から、差別してきた者たちこそいまわしい存在であり、長い間差別に堪えてきた自分たちこそ真の人間として讃えられるべきだ。そういう時代がやってきた。それは水平社によせる期待である。

「人間が神にかわろう」とは、人間が神にかわって自由・平等の新しい社会をつくるという訴えである。

吾々がエタである事を誇り得る時が来たのだ。

どのような厳しい暮らしにあっても、どのようなひどい差別の中にあっても、決して卑屈になることはなかった。生命の重さを見事にとらえ、必死に子どもを育て生きてきた。人間としての誇りを失うことはなかった。人間としての誇りを失わずに生きてきたことがわれわれ部落民衆の誇りである。

吾々は、かならず卑屈なる言葉と怯懦なる行為によつて、祖先を辱しめ、人間を冒瀆してはならぬ。

私は、エタだと蔑まれ、部落民だと嘲られ、身も心も冷え凍る思いの毎日であり現在も変わりがない。しかし、それだからといってわが身が惨めだとか、悲しいとかと思うことは決してない。なぜなら、私は世間からエタだと蔑まれ、部落民だと嘲られなければならない理由を、我が身にも我が心にも感じないからだ。今かりに、日本の全国民が、口を揃えてお前は生まれつき賤しいエタだと罵ったとしても、私は自分がその嘲りに相当する賤しい人間だとは絶対に思わない。

どうしてかという、この地球上の人間は、人種によって肌の色に白い黒いの違いはあっても、すべて人間として平等だと信じているからである。

宣言文の言葉を胆に銘じている人間の強さ、すべて人間は平等だという信念に支えられて生きている人間の姿、人間平等の思想から人間性の尊厳の自覚は生まれる。

そうして人の世の冷たさが、何んなに冷たいか、人間をいたわる事が何であるかをよく知っている吾々は、心から人生の熱と光を願求礼讃するものである。

数々の差別の痛みを知っているからこそ、真に人間をいたわる優しさを持っている。呪われた夜のように暗かった過去、魂の冷え凍るような周囲の差別、これからは解き放たれて人間としての尊厳が熱や光のように照り輝く人生を心から願い求め讃美する。

水平社は、かくして生まれた。

- ① 同情融和運動の否定
- ② 部落民衆の人間性尊厳の自覚
- ③ 団結

この三点を強力に推し進めることによって、部落の解放を期す必要から水平社は結成された。

人の世に熱あれ、人間に光あれ。

人間性が蹂躙され、呪われた夜のように暗かった人の世、そしてその中で魂の冷え凍るような思いで生きてきた部落の民衆、そして、部落だけでなくすべての人間の上に人間の尊厳が、熱や光のように輝かしくよみがえれと願うおおらかさ、優しさ。

水平社宣言が日本の近代社会における人権宣言といわれるのは、水平運動が部落の民衆の解放のみならず、すべての人間の解放を目指す普遍的原理を内在しているからである。

## 1986年文部省指定同和教育研究発表会公開授業の記録（藍住中学校3年4組）

主 題 「人の世に熱あれ、人間に光あれ」

1986年11月13日（木）

資 料 「水平社宣言」（解説）

授業者 森 口 健 司

T1：一学期、丸岡忠雄さんの「ふるさと」「意識の芽ばえ」を通して、丸岡さんの苦しみや悲しみに触れて、部落問題にかかわるさまざまな生き方を学習してきました。二学期、水平社宣言を宣言の一つ一つの文章にさまざまな思いを込めて、さまざまな資料を通して、宣言文を読んできました。宣言文が、みんなに取ってなんであったか。私に取ってなんであるのか。水平社宣言は、私たちに三つのことを教えてくれたと思います。一つは、同情融和の否定ですね。このことについては、みんながいろいろなことを通して、私にこう話してくれました。それは、同情や憐れみでは、決して差別はなくなならないということだったですね。一つは、人間を尊敬する。人間とは崇高なものであり、元来、尊敬されるべきものであることを学びました。それともう一つは、団結。団結こそ、弱い者が生き残っていく知恵であるということを知りました。今日は、この水平社宣言の願いに寄せて、みんなの願いを語って欲しいと思います。宣言に寄せるみんなの思いを語って欲しいと思います。

CA：水平社宣言は、部落の人たちの苦勞や苦しみの中からつくったすばらしい文だと思う。同情融和やその他の政府の方針もだめで、部落の人たち自らの手で、部落の解放を願った水平社宣言は、部落の人たちが、僕たちや部落の人たちみんなのためにつくった宣言文だと思う。差別される部落の人たちも、差別する人のどちらも、すべての人間の幸福を願っているところがすばらしいと思います。僕は、水平社宣言を勉強して、部落の人たちのすばらしさを知りました。水平社宣言の怒り。怒りの中に人間としてのすばらしさ、優しさがあると思います。部落の人の中には、人間としてのすばらしさがあると思います。それは、長い間、しいたげられて、いじめられてきた中から生まれてきた人間らしさだと思います。宣言文にも、部落の生まれであることを誇りうる時がきたと書かれています。それは逆に、差別してきたみんなが、恥ずかしいと思うようにならなければならないし、すべての人間の幸福を願うには、差別する人が、自分のために差別するのをやめなければならないと思います。

T2：優しさは怒りの中に培われる。A君が、宣言に寄せる思いを今話してくれました。「人の世に熱あれ、人間に光あれ」部落の人間の幸せだけを願ったんところが。苦しみを背負うたから、悲しみの中に生きたから、すべての人間の幸せを願った。水平社宣言の思想に触れて、A君が話してくれました。

CB：今日までに学んできた水平社宣言は、私にいろんなことを教えてくれました。人間としての生き方、そして人間としてもつべき真の心を。今まで、人間は人間らしく生きてあたりまえと思っていました。でも、今の私がはたして人間らしく生きているか、自分でも分かりません。多分、うわべだけの人間を演じているだけだと思います。考え方だって、今の大人と同じで、実際、そんな気持ち全くないのに、内心思ってもないことをかっこよく言ってみたり、人と話を合わせたり、多数派の一員として行動していたんだと思います。でも、この水平社宣言を学び、今の私ではいけないと思いました。今の私は、差別されてきた人の一段も、二段も上に立って、ただ同情しているだけと思うのです。しいたげられてきた人たちは、私なんかよりずっとずっとすばらしい心の持ち主です。真の心の持ち主です。私なんか、一生かかっても持つことのできないものを持っています。これから先、自分がどう生きるか、それはもちろん自分で

決めることです。他人には関係ないことだから、でも、そのことがとても怖いのです。不安でたまりません。それは人間らしく生きていく自信がないからです。まだ時間はあります。私は、この水平社宣言を私の心の教科書として、じっくりと考えてみようと思います。今の私の課題は、まず、人を思いやることです。自分のことだけでなく、人の心まで大切にできる心を育てていきたいです。

T3：「水平社宣言を私の心の教科書として……」。この言葉を聞いた時に、胸がいっぱいになりました。みんなと宣言を勉強して、本当によかったなあと思いました。宣言の中から、同情融和の否定と言うことを学んできました。一段上に立って、かわいそうじゃ。気の毒じゃ。そういう同情や憐れみをたれることが、すでに、その人を一段下に見下して、押さえつけている姿であるということ、みんなはいろんな事実を通して感じてきましたね。自分の生きる課題として、水平社宣言を考えていきたいと思います。身近なことを通して、みんなの家でのことを通して語ってください。

CC：この間、私は部落問題のことを家の人たちにいろいろ話しました。しばらくして、何やら話をしていました。こそこそ話だったので、よく聞こえませんでした。四本指をしていました。私は、その指をすぐには分りませんでした。しばらくして、部落だということに気がつきました。普段は優しいお父さんですが、この時ほど裏切られたような気持ちになったことはありませんでした。そして「同和教育は、しない方がよい。するから部落というものがあると、分ってしまう。しなければ分らない」というのです。しかし、現に親たちが、子どもに四本指を見せている。他の家も同じだろうと思う。知らず知らずのうちに、親から子、子から孫へと伝わっているんだ。だから今の時代でその親たちを変えなければならない。孫まで伝えてはいけない。悪い意識を持つ親たちを変えるために、私たちは、もっともっと同和教育をしなければならないと思うのです。私たちは、部落差別をなくそうとするために、どれだけ人が苦勞し、どれだけの人犠牲があったかを、自分の思いと一緒に真実を知らない親たちに、語っていく必要があると思うのです。

T4：家族のことをたくさんの人の前で、家族の本当に情けないことをくやしいことをたくさんの人の前で話しするのは、本当に勇気がいります。必ず分ってくれる。必ず人は変わる。お父さんは変わる。お母さんも変わる。そのことを信じて、話し続けていきたいと思います。頑張っていけないかなあと思います。同和教育というものをいつもこう思っています。本当の人間になるための、本当の教育だいつも思っています。同和教育反対を唱える人、これは少数でないと思います。人間の生き方を考える教育がなくて、なんで人の幸せが見えていくか。そのことを強くいつも思います。

CD：「知らないことほど怖いものはない」とよく言われますが、部落問題でも同じことがいえると思います。僕は、1年前まで私立の中学校にいたのですが、その中学校にいた2年間で、一度も部落問題の授業はありませんでした。僕は、小学校の時、ほんの少しだけやったような気がします。はっきり言って、僕自身無知無関心でした。歴史の中に出てくる形だけのことは知っていました。中学入学時にもらった教材の「わたしの願い」という本を私立の学校では、使ったことはありませんでしたが、自分で読んだことは度々ありました。そのなかに出てくる「部落」「えた、非人」「あっち」などの意味も知らずに、僕はただ可哀相だといういわゆる同情融和の考えしか持ちませんでした。まして、県庁や役場などにある「知ろうなくそう部落差別」などという垂れ幕にもなんの関心も持たなかったのも事実です。しかし、あるきっかけ

で藍住中学校へ転校してきて中学3年になってから、詩「峠」から始まり丸岡さんの「ふるさと」や「意識の芽ばえ」を学んできました。そして、人間の本当の生き方を追求し、自分の心にある醜い心、自分以下を求める心の醜さ、同情融和の考え方の間違いなどを考えながら、水平社宣言を勉強して来ました。そこで僕は、前の学校をけなすわけではないけど、本当の教育である同和教育をしない部落問題を学ぼうとしない学校は、ダメだと言いたいのです。今もその学校に友だちがたくさんいます。その友だちたちが、将来真実を知らず、人の口伝えだけを信じて差別をし、また新しい差別を生んで、差別の根本を維持していくようになると思うのです。現在、このような学校が何校あるでしょうか。公立、私立の関係なく部落問題を学ぶのは、日本人の責務であると思います。差別している人が一番みじめだということは、水平社宣言で学びました。全国水平社創立大会も歴史の一点としてではなく、これを人間の真実の姿としてとらえることが大切だと思います。何かすべて自分が、分っているみたいな言い方になったけど、僕の人生はこれからです。これからいろいろな人と接していく中で、人間の真実が分るようになることが、僕にとっての部落問題であって、水平社宣言だと思います。

T5 : このクラスには、すばらしい仲間がいます。本当にすばらしいと思います。ある子がこんな話をこのまえしてくれました。「先生なあ、授業を他の授業をしんどうなって、抜けたろかと思うことがあるんじゃないか」「そやけど、ずうっと、ずうっと、道徳の時間だけは、抜きたいや抜けようやと思うたことなかった。なんでだろうか」と僕に話してくれました。道徳の時間、お前はようできる。お前はできんというような選別は一切しません。お前は分らん、お前は分る。そういう選別もしません。みんなで生きることを求めていくということは、みんながこれから生きていく人生の中で大きな支えとなると思います。こういう機会に巡り会えたみんなは、本当に幸せであると思います。仲間と共に、生きることを求めていく姿というのは、本当に尊い姿であると思います。そして、その中に、みんなの中に水平社宣言が、位置づけられてきました。水平社宣言にかかわって、みんなの思いをどどんつないでいってください。

CE : 僕にとって水平社宣言は、人間の平等と、人の苦しみを自分もいっしょに感じることだと思います。そして差別に対して、いっしょに闘っていくことだと思います。これまで部落差別が、多くの人たちを死に追いやったことについて、心の底から悲しみと怒りを感じます。差別する人は、差別される人に一段上において「お前はかわいそうやのう」という人を見下した憐れみの心を持っています。その憐れみの気持ちには、腹がたってきます。「私は、決して差別はしていない」と自分の姿に気づかずにいる人がいますが、そんな口先だけの人がいるからこそ、差別が生まれるのだと思います。そんな人は、全然差別の悲しみや苦しみを知らないと思います。だから、そんな人こそ差別されてきた人の悲しみや怒りを知ってもらい、いっしょに怒りの涙を流して欲しいと思います。そして、人間すべてが、悲しみや怒りを自分の身体に感じ、心の底から人に優しくなれたら、差別はなくなると思います。水平社宣言は、まさにその叫びだと思います。

T6 : 家庭訪問の時を思い出します。E君の家へ行った時、おばあちゃんが迎えてくれました。あの家庭訪問は、心に残っています。忘れません。おばあちゃんの優しい言葉が、今も僕の胸に響いています。E君の胸の中にも、いつも響いていると思います。E君が、学校へ行く時に、足が不自由で歩きにくいけど、一生懸命玄関まで出て行って「今日も気をつけていきなよ」と言って、手を合わせて見送るんですけど、僕に話してくれました。なんてすばらしいんだろうと思います。

CF : 私にとって水平社宣言は、私をいつも勇気づけてくれ、励ましてくれるものです。たとえば、どんな時にかと言うと、苦しくて、いろいろなことで、とてもつらい思いになった時、水平社宣言をよく思い出すことがあります。全部はとても覚えてないけど、宣言文が少しづつ腹立ちや苦しさを消してくれて、反対に「なんだこのくらいのこと……」と思うことがあります。それと、もう一つ私のにとって宣言文は、差別を卑しく、人間の恥だと思わせてくれるものです。

T7 : Fさんの中に、宣言文が生きている。そのことが本当にうれしいなあと思います。みんなの中に宣言文が、あの一一つが生きて、本当に自分を励ましてくれる。勇気づけてくれる。がんばらなと言ひ、卑しい生き方はせんぞ、人に魂を売るような愚かしい生き方はせんぞ。そういう決意をもって、自分を見つめていく。そんな宣言文であって欲しいと思います。宣言を学んでいく中で今まで見えなかったものが見えてくる。今まで分らなかったことが分ってくる。そんな思いになったということをみんなから、いっぱい聞きました。今まで、何気なく生きてきた。何気なく過ごしてきたことが「ああ、いかなんだ」と見えてきた。そういう自分と出会った時に、みんなが成長していったんですね。成長していくんですね。

CG : 部落問題を真剣に考えるようになって、だんだんと本当のことを知るようになりました。そして、今までの間違った自分を見つけていく中で、人間として、これからどんな生き方をしていくかということ自分を自身に問いかけてみました。今、思い出してみると、過去の私は、腹の立つ考えばかり持っていました。友達に対しても軽々しい言葉で、平気で相手の心に傷をつけてきました。学校からの帰り、みんなから外されて、いつも一人で帰る子がいました。その子は、一人ぼっちになると決まって、私たちの方へ石を投げてきたり、私たちのランドセルを引っ張ったりして、いやがらせばかりしていました。その時の私は、一人ぼっちの子がすることをただのいやがらせとしか受け取っていませんでした。でも、今考えてみると、それは一人でいる悲しさやさみしさや自分の存在を行動によって訴えていたんだと思います。なのに、私は、その上からまた押さえつけるようなことをしました。大勢対一人でベラベラと文句を言ったりして、まるで、大人が子供にお説教するような高慢な態度を取っていたのです。思いやりの言葉は、ひとかけらもありませんでした。一人ぼっちの子に味方すると、みんなから仲間外れにされるという思いが、一番にあったからだと思います。そして、今、間違ったことがあっても、大勢なら正しいも同じ、みたいな考えを持っていた過去の弱い自分が見えてきました。

T8 : 今まで見えなかったものが見えてくる。今までそう思っていたことがやっぱり違うかったということが見えてくる。宣言によって、そのことが見えてきた。それが人間として生きる喜びですね。

CH : 先生が授業の中で「人のために」という言葉が、一番好かんと言った時、私はどきっとしました。私は、小さい時から「将来何になりたいん？」と尋ねられた時、きまって「人のためになる仕事がしたい」とか「身体の不自由な人のためになる仕事がしたい」などと言ってきたからです。今まで、よいと思ってきたことが、人を上から下に見ていることなんて……、何てことだろう！「人間が生きる」ということは、「共に生きる」ことだったんだと思い知らされました。本当に、今私は、自分に歯がゆい気持ちでいっぱいです。私の15年の歴史を振り返ると、たくさんの差別の跡がありました。かあさんが、交通事故にあつて、ガードレールに当たった時、みんなが「あっちの人の塀でなかってよかったなあ」とか「あっちの人やったら、団体できて、ごっついお金、絞られるで」などと話しているのを聞いて、私も本当にそうだと



思ってきました。また、家族でドライブに行った時なんか、前からあのへんは、あっちの人が多いけんあと聞いていたせいか、他と違う目でそのへんを見たこともありました。そうした意識した目で見てきた私は、まさに差別の中を生き、差別してきたのです。3年になって、水平社宣言をもとにさまざまな部落差別の真実に触れて、やっと私は、過去の私がしてきた差別が見えてきたような気がします。また、周りの大人たちの言った差別の一つ一つが、間違っていたとはっきり分りました。でも、その15年間をきれいさっぱり洗い流すことはしたくありません。差別してきた自分への歯がゆさ、罪の意識を、差別は絶対に許さないという怒りに変えて持ち続けていきたいです。

T9：差別しないんでない、差別のできない人間にならなければならんのです。差別は、絶対に許さんという人間にならんといかんのです。人は言います「私は差別しません」と。しないんでないんです。でけんようにならんといかんのです。人間として、差別やいう、人を虐げることが絶対にでけん。そんな心をつくっていかないかんですね。それが、悲しみが見えるということですね。悲しみが分るということですね。

CI：自分と部落問題は、あまり関係のない、どこか遠くのここのように思っていました。だから、まさか、自分が、人を傷つけているなんて、思ってもいませんでした。しかし、私は、知らず知らずのうちに、人を傷つけていました。そのことに、気づくことが、なかなかできませんでした。それは、部落問題を自分にかかわる問題として、真剣にとらえていなかったからだと思います。そんな自分の愚かさに気づいた時、情けない気持ちと共に、自分に対する腹立たしさがこみ上げてきました。他人の苦しみを分ろうとしない人が、たくさんの人たちを苦しめ、傷つけてきたのだと思います。自分が苦しくないから、自分が傷つけた相手の傷口が見えず、苦しめていることに気づかなかったんだと思います。そして、本当の自分の姿が見えないから、自分で自分を傷つけていることに気づかなかったんだと思います。私もそんな人間だったと思います。表だけ、人間の格好をしているだけで、本当の人間らしい心を持っていなかったと思います。人間には、心があるからすばらしいと思います。他人の痛みや苦しみが、自分のものと思えるような、本当の中身のある心を持つ人間になりたいと思います。

T10：差別が分るということはね、いつも思います。自分が傷つけた相手の傷、相手の傷の痛みが、自分の胸の痛みとなることです。そこを部落だと誰が決めとんですか。その人を部落だと誰が決めとんですか。部落であるという歴史はないですよ。差別を受けてきた歴史はあるけれど。その人間が部落であるという歴史はないですよ。そこにあるのは、差別を受けてきた、虐げの中を生きてきた歴史だけです。部落だと、相手に対して、その特定の場所に対して、部落だと見ていく。そのことが差別なんです。自分が相手を傷つけてきたその傷に気づく。その傷の痛みが、自分の胸の痛みとなった時に、その人の心の中には、差別は許さん、差別はできんという思いが育っていきますね。いろいろな思いが、みんなの中に宣言を通して浮かんできます。

CJ：水平社宣言を勉強していく中で、本当に何か大きいものを得たような気がします。自分への恥ずかしさをたくさん感じました。自分以下を求めること。それは人間としてとても恥ずかしいことです。自分以下を求めることによって、自分が一段上に立ち、差別というものを生んでいきます。自分が精一杯生きることは、自分以下を求める心をなくすことだだと思います。私も今まで差別してきた部分がたくさんありました。そのことをよく振り返って、自分以下を求めるのではなく、底知れぬ悲しみを持った人たちと、共に歩もうとする人間になりたいです。

水平社宣言が、これから私が生きていく上で、私のつらいときの心の支えとなると思います。いつも心の中で、私に私自身に、生きることの意味を訴えてくれるものだと思います。

T11：「自分以下を求める心」この言葉は、みんなの中にも、先生の中にも、鋭く突き刺さった言葉ですね。先生自身の生き方の中でも、深く考えさせられた言葉です。

CK：前に僕が見た映画で、どんな題だったか覚えてないけど、ばくちをしている場面がありました。その場面の中で、韓国人か、朝鮮人かは分からないけど、その人がばくちに勝って「やった。やった。」と喜んでいました。すると、その相手の人が「朝鮮人が何をうるさあに言ってるんな」と馬鹿にしたように言いました。その時、その映画の主人公の人が、「朝鮮人も、日本人も、同じ人間でないか」という言葉を言いました。その言葉はすごいと思いました。人間は、自分より下の者がいると安心すると学んだけど、僕も、テストの点数が返ってきて、とても悪い成績で、親に怒られた時「まだ、僕より点数の低いものがある」と言って怒られたこともありました。この気持ちは差別につながる意識だと思います。そんなところも、小さいことだけど直していかなければならないと思います。

T12：みんなに言いましたね。「競争の原理と連帯の原理をみんなで統一していこうでないか」と。決して、成績はよくなつたらん、しかし、順番がよくなった。それで安心していく。そんな愚かな思いは捨てていこうでないか。ここに集うた44人が、みんなでよくなるのではないか。みんなでよくなる競争をしようではないか。みんなで支えおうてみんなでよくなっていく。みんなで伸びていく。そんな競争をしていこうではないか。競争だけではいかんですね。その時に支えおうていく。みんなで頑張っていこうとする連帯の思想がなければ、連帯の考えがなければ、みんなはバラバラになっていきますね。そのことを今、K君が言ってくれたですね。自分以下が欲しい、自分以下を求めてきた自分に気づいていく。その中で、いろんなものが見えてきますね。

CL：小さい頃、私はどちらかと言うと「いじめられっ子」でした。幼稚園の年長組の時、私は藍住に引っ越してきました。前の幼稚園ではみんな仲よく遊んでいたけど、藍住の幼稚園ではどうもなじめずいつも一人でした。小学校に入っても友達はずらず、数人の女の子にいじめられてきました。でも、クラスに一人私とよく似た「いじめられっ子」がいました。その子は、私よりもっとひどいことをされていました。でも、私はその子を見て「ああ、よかった。私よりつらい子はまだいるんだ」ということを思い、その子がいじめられることで私は、ほっとした気持ちになっていました。私は今、そんな気持ちを持った自分がとても恥ずかしく、それ以上につらい思いでいっぱいです。自分に何かできなかつたのか、何もしなかつた自分が、今とても情けないです。私はその子に一生謝っても許してもらえないことをしてしまったと思います。その子に対して私は何もしていないけど、私の心の中に大きな傷ができてしまいました。自分以下が欲しかったあまりに……。私は今、一步一步前進しています。これからの私は、宣言文を通して立派な人間として生きられるように頑張ります。そのために一日一日を精一杯生き抜きます。

T13：誰でも、いじめられるのはつらいです。一人になるのはつらいです。苦しいから、つらいから、自分がいじめられまいとして他の人をいじめてきた。それがつらい。情けない。そのことが分ってきた。そのことがわかった。自分を守ろうとして、他の人がいじめられるのを逆に喜んできた。そんなかつての自分が見えてきた。なんでその時に、競争だけでなく、競り合うだけでなく、そういうふうに見ていくだけでなく、どうしてその子と連帯していけなかつたん

だろうか。その子と力を合わせていけなかったんだろうか。今、そんなことが見えてきた。自分以下を求めるということは、本当にあさましい姿であると思います。また、生活ノートの中に、こんなことも書いてくれたですね。「自分以下なんて存在しない。もし仮に、自分以下がそこにあるとしたら、それは昔の自分だ。過去の自分だ」と書いてくれたですね。人は、いつも大勢の中で生きることを求めます。それが正しくないと分っていても、大勢の中でいたら「それでいいわ、いいわ」と思っています。しかし、水平社宣言は違う。少数であったけれど、人間の真実を貫いてきた。虐げられたものこそ、深く人間を愛することを知る。いじめられてきたからこそ、深く人間を尊敬することを知る。人間の中にある真実を学んできましたね。

CM：私にとって、部落問題というのは、人間の強さや弱さを知ることです。大勢の中にいる人たちは、強そうに見えます。少数の中にいる人たちは、かよわそうに見えます。でも、外見でなく、一人一人の心の中はどうでしょう。大勢の中にいる人たちは、自分一人の意志では何もすることができず、人の目を気にしてばかりの弱い心の持ち主だと思います。本当の強さというのは、どういうことをいうのでしょうか。ただ、人数が多いだけ、声が大きだけ、力が強いだけ……、このような外見だけの強さでしょうか。そんな考えは間違っています。自分自身こうでありたい、こう生きていたいと願う心は、みんな持っています。でも、この素直な心を崩していこうとする圧力があります。「その圧力にどこまで抵抗できるか」ということが強い人間になるか、弱い人間になるかの別れ道だと思います。でも、今の世の中は、どんな場合でも、少数意見より多数意見の方が、正しく見られるように思います。だから、多数意見の方だけが、重視されるのではなくて、少数意見はいつも重視されなければならないと思うのです。私は、大勢の中の一人ではなくて、いつも少数の中の一人でいたいのです。

T14：水平社宣言が、少数の中にある真実を私たちに教えてくれましたね。大勢でいたら、みんなと行動したら、それが間違いであっても、心のどこかで安心して大勢の方へついていく。そんな情けない人間にはなりたくないと思います。私の好きな言葉があります。いつも心の中で誓っている言葉があります。「100人で歩こうって、歩き出して歩き始めたら、99人が走り出して1人になっても歩き続ける。そんな人間でありたい」。いつも、そう思います。みんなと共に、生きることを求めてきました。また、部落問題を通して人間の生き方を考えてきました。そんな営みを今も、またこれからもみんなと別れるまで続けていきます。こんな教育の営みを先生が、また違う職場で、違う学校でやろうとした時、みんなが、本当にみんなの先生が、いっしょにやってくれるだろうか。そんな気持ちになることがあります。でも、一人になってもやる。自分が教師になった教員になろうと思った一番のスタートが、このことだったから一人になってもやる。もし一人になっても一人になったから負けんという思いを大切に生きていきたい。いつも心の中は、そんな熱い思いに溢れています。みんなの中には部落問題を通して、本当に人間を大切にすることが、どういうことであるかということが、今、育っています。そんなみんなの輝きが、みんなの生活ノートの中にいっぱい出てきます。なんて清らかな心が持てるのだろうか、なんてすばらしいのだろうか、いつも思います。本当にすばらしいです。学校へ来る時、吉野川の流れをながめながら来ています。毎朝その吉野川の流れの中にみんなの顔が浮かびます。「今日も学校でみんなの生活ノートが読めるなあ」と思ったらうれしくなってきます。今日も頑張るぞと力がわいて来ます。それは部落問題の学習を通して、人間の生き方を考えるという教育の営みがあって、みんなの中に人を愛する、人間を認めていく心が育っていて、人間の温もりをいつも感じていて、自分を励まし、そして先生を励

ましてくれて本当にありがたい。ありがとうという気持ちでいっぱいです。

CN : この前学校の帰りに、田んぼで仕事をしているおばさんがいました。知らない人だけど、目があったので挨拶をしました。私が挨拶をすると、おばさんにもっこり笑って挨拶を私にしてくれました。そのおばさんの笑顔が私の心の中に飛び込んできました。本当に清々しい気持ちになりました。つくった笑顔じゃなくて、素朴というかなんと言っているかわからないけど……。とにかく胸が一杯になりました。ああ、よかったと思いました。なんかすごく幸福な気分になりました。言葉をかかわさなくても、気持ちが伝わるんだなあと思いました。

T15 : 知っている人ではないんですね。一生懸命汗を流して働いている人を見た時、心が穏やかになって、目と目があったとき頭を下げた。すると仕事をしているおばさんも頭を下げてくれた。その挨拶により心が温かくなった。心が安らかになった。本当に清々しい気持ちになった。先生もその生活ノートを読んだとき心が和みました。

C0 : この間、母と徳島市内を歩いていると、足の不自由な人が頭を下げて座っていました。横に松葉杖が置いてあり、前には小さな箱が置いてありました。箱の中には、百円玉や十円玉が少しはあっていました。私は「少しですけど」と言って、自分のお小遣いの中から五十円玉を入れてあげました。その人は深々と頭を下げてくれました。母は「そんなんせいでいいよ」と小さい声で言いました。でも、私は自分の今の幸せを分けてあげられたという実感があつたし、勇気が出せたということに喜びを感じました。帰るときもその人の前を通りました。5メートルぐらい手前のとき、一人の老人が男の人の前に座り、お金を箱じゃなく、その人の手に直接渡していました。私もあの老人のように箱に入れるのではなく、その人の手に直接渡して上げれば、少しのお金でももっともって幸せを分けてあげられたと思いました。この街にも、あんな人がいるんだなあと思うと嬉しくなります。また、そんな人でありたいという気持ちが、私の心に渦を巻いています。

T16 : 直接に「少しですけど」と渡してあげたらよかったなあと思う。この思いは「ために」ではなく「共に」生きようとする姿ですね。すばらしいと思います。

CP : 部落差別は、私には遠いことのように思っていました。でも、遠いこと関係ないことそんなことは絶対にはないのです。なぜなら、差別は自分自身がつくっているものだからです。私は、南沢恵美子さん、中島一子さんの死の手紙を聞いたとき、本当の優しさが何であるかを知りました。それは、恥ずかしいことですが、私は同情することが優しさであると思い込んでたからです。「人間に光あれ」の同情融和運動の話を学ぶまでは、そうだったような気がします。そして、あの手紙を学んだとき、はっきりと優しさがわかりました。どうして、あんなに優しくなれるのだろうかと思うと同時に、そんな優しさの持ち主にあこがれます。私は、恵まれ過ぎて少しのことでも、恨みつらみをすぐ口にしてしまいます。今、私はそのことを恥じています。弱い人間だったと思います。本当にあの手紙はなんとも言えません。私は生きることを学ぶ中で本当に優しく強い人間になりたいです。

T17 : どうしてそんなに優しくなれるのだろうか。どうしてこんなに優しいのだろうか。自分の生命を奪った、自分を虐げた人に対して、差別は憎んでもその人を憎んでいない。その優しさに、触れたとき、胸が一杯になりました。全体会の練習で「手紙」の歌を歌った時に涙を流しているみんなを見たとき、優しいということが、優しさということが、みんなの中に重く入っていったんだということを強く感じました。

CQ : 私は、水平社宣言を勉強してきて、優しさというものが見えてきたように思います。今ま

での私は、優しさとは、ただ親切にすることだけとと思っていました。でも、水平社宣言を勉強して、困難を乗り越える勇気、人と人との間を隔てる垣根を取り除く力、人の痛みがわかること、差別に対する怒り、そして、人間らしい生き方を選び出す力が、本当の優しさだとわかりました。水平社宣言に出会って、自分自身が一番変わってきたと思います。以前の私は、差別されてきた人たちの痛み、苦しみ、悲しみをわかったことはありませんでした。でも、水平社宣言を勉強してきて、差別の苦しみ、悲しみがわかってきたと思います。私は、人間として、人の苦しみが自分の苦しみとなってわかる生き方がしたいです。

CR：私は、先生が話してくれたある部落の青年の言葉「私が、幸せになって悲しむ人ができるのなら、部落差別はなくならなくていい」。この言葉を聞いたとき、信じられない思いになりました。人間の真の優しさを見たような気がしました。また、中島一子さん、南沢恵美子さん、佳代さんの手紙もそうです。手紙の中に「差別がにくい」とはあったが、決して人を自分を虐げた人を恨んでいない姿に、目が醒めるような思いがしました。どうして、こんなに優しくなれるのだろうかと思いました。そして、今まで虐げの中に、苦しみの中に生き続けた人たちだからこそ持つ、持てる優しさなんだということがわかりました。私は、心の底からくるとしての優しさをもっていなかったと思います。いつも何かあると、人を恨んで自分を納得させてきました。部落差別の学習を通して、真の優しさと教育の本当の意味がわかってきました。

T18：最初の話ですけど、前に話しましたね。ある部落問題の研究会で、講師の先生が「部落差別がなくなっても、人間はまた違う知恵で、また違う差別をつくりだすでしょう」と話したとき、部落の青年が立ち上がって言った。「自分たちが味わってきた苦しみを他の人も味わうんだったら、部落差別はなくならなくていい。こんな悲しみを味わう人がおつてはならんのです」と必死に訴えた。泣きながら訴えた。

CS：私は、水平社宣言を通して、同情融和の考え方を学んで、いろいろと考えてみると、私も、同情だけをしてきたように思えてきました。今まで、資料や映画を見てきても、「かわいそうに」という思いしかありませんでした。それが、怒りになったことはなかったのです。かわいそうにと言うことは、やっぱり自分を一段上においていった言葉だから、いつまでたっても、部落の人々の本当の痛みや苦しみを分らないし、一步も、部落差別をなくしていくためには、進んでいかないことが、私なりに分ってきたように思います。いつか、私に部落問題がぶつかってきた時、私は苦しんでいる人々と共に並んで闘っていきたいです。そして、私が部落の人と親しい仲になり、結婚するようになって、親や周りの人が反対したとしても、絶対に結婚をやめるようなことはしません。絶対結婚します。そして、私の子供が部落の人と結婚すると言ったら、私は何のこだわりもなく、「幸せになりなさい」と言えると思います。たとえ、誰が反対しても、私は味方になってあげます。私はこれからの人生ずっとこの気持ちで生きていきます。

T19：Sさんの中にも、みんなの中にも、新たな決意が生まれていますね。

CT：僕が、小学校5年のときだったと思います。友達と一緒に遊んでいたとき、中学生の友達が、〇〇のところに行かん方がいいぞとか、〇〇のやつは怖いぞなどと言っているのを聞いたことがありました。僕はどうして怖いのか、そこへ行ったらどうして悪いのか、わからないまま、いつのまにか僕もそんな思いを持つようになってきました。これはいったい何でしょうか。これが差別なんです。僕は、そこがどんなところかもわからないのに、そこに住んでいる人を差別してきたのです。そこに住んでいる人は、とても優しい人たちなのに、自分はなににも知ら

ないで、人から聞いただけで、そこに住む人は怖いと、近づかない方がいいと思ってきたのです。水平社宣言を学んでそのことに気がつきました。僕は、差別というものの本質が何もわかっていなかったのです。今、そんな自分に歯がゆさと怒りを感じます。過去のことにこだわらず、未来のことにくよくよせず、今を大切に生きることが大切だと学びました。これからの僕に問われているのは、自分が差別したことに気付き、これからどのように生きていくかということだと思います。人間だれしも弱い心は持っていますが、僕の心の奥にある差別と闘い、差別という名の壁を破ったとき、本当の自分が見えてくると思います。部落差別やいろいろな差別は、僕にとって真の人間になるための心の峠です。「人間、憐れんではいけない。踏みつけてもいけない。人間は尊敬されるべきものである」と言ったゴーリキの「どん底」や「手紙」が、とても心に残っています。「手紙」の歌詞の「悔やんではない。別れても……」この詩はどうしてと思います。歌っていたら心から涙が出そうになり、体が震えてきます。心から好きになった二人がどうして別れなければならないのかと思います。「起きよ光を放て」の中にもあったけど、決して悲しみの涙は流しません。しかし、怒りの涙は流したい。社会に出て、人を尊敬する心、怒りの涙はからさずに持ち続け、友と一緒に困難を乗り越えていきたいです。

T20：今日みんなの言葉の一つ一つが、私のうちにあるものを奮い立たせてくれたと思います。胸が一杯です。今日、先生の心にも、みんなの心にも、一つの火が、一つの火が、ともっていったと思います。みんなの心の中に、私の心の中にもった一つの火を大切にしていきたい。その火は何か。それは部落解放のともしび。部落解放の火ですよ。部落解放の火というのは、人間解放の火ですよ。人間が人間として生きるための火ですよ。その火はね。どんなことがあっても消えない。何があっても消えない。どんな障害に出くわしても消えることがない。ここにともった44人の火が、44人のともしびが、みんなが別れていっても消えることなく、まただれかに受け継がれていって、その火が広がっていくことを心から信じています。願っています。一つ一つの火を大切に、心にもった火を大切に、これから生きていきたいと思います。今日は、ありがとう。



1986年度藍住中学校 3年4組 藍中祭 ～仮装行列～